Ⅲ　赤城山信仰と南麓集落にみる歴史的風致

【赤城山頂から南麓（東部）にかけての歴史的風致の概要】

市街地から見た赤城山

日本百名山の一つに数えられる赤城山は、上毛かるたに「裾野は長し赤城山」の読み札があるように、東西に長く伸びる裾野が特徴で、そのスケールは富士山に匹敵するとも言われる。古くから山岳信仰の対象として崇められ、山体を大蛇や大百足に見立てた神話や山頂の沼地にまつわる伝承などが数多く語り継がれている。山中には、神話の時代から近代まで幅広い年代の歴史的資源が散見されるが、中でも赤城山を御神体とする神社では、群馬県の古い地名（上野・上毛）のルーツである「上毛野君」の始祖とされる豊城入彦命（崇神天皇の皇子）を祭神としており、記紀に伝わる皇族由来の山として多くの武将、指導者層が参詣した記録が残る。

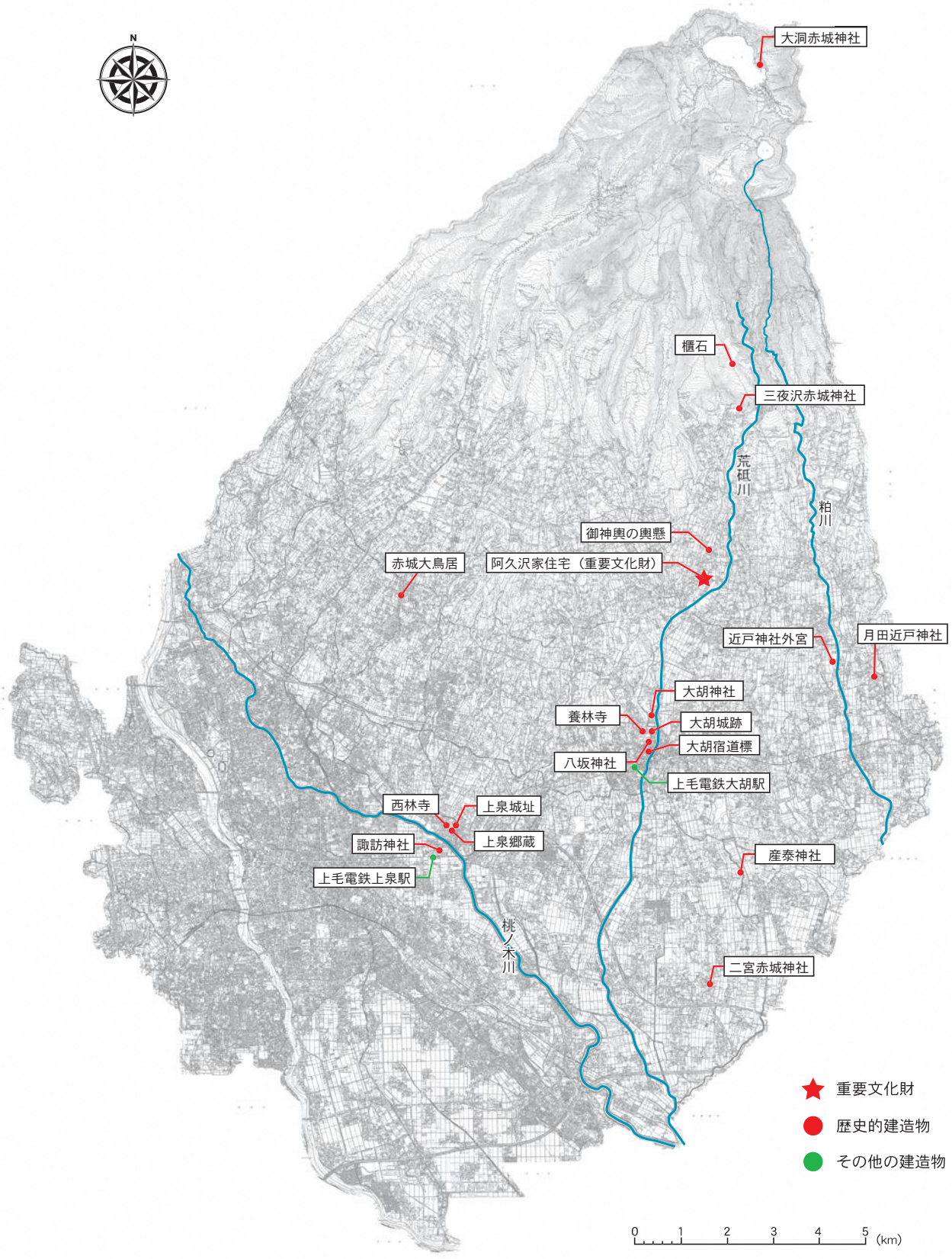
ふもとでは、冬場に「赤城颪」と呼ばれる強い北風が吹き下ろす一方、山から流れ出る養分豊富な水流が里村に豊かな実りをもたらし、古代から多くの人々が暮らしを営んできた。特に、西大室町・東大室町には、現存する大室古墳群をはじめ大小 1,000 基以上の古墳があったとされ、有力な豪族の居住地であったことが推察されている。平安期には、ふもとの大胡地区から西部一帯を坂東武者の名門である大胡氏が統治したが、室町期以降は長らく戦乱の時代が続き、上泉町から新里町（桐生市）にかけて、山あいの地の利を生かして数多くの城が築かれた。江戸期以降、治世が安定すると、ふもとの集落は宿場町や農村として定着し、それぞれの生活文化が営まれる中で独自の祭礼や神事が育まれていった。

そして現在、ふもとの集落は市町村を構成する行政区画に編入され、街並みの画一化が進むとともに、社会情勢の変化やライフスタイルの多様化によって集落そのものの変容が進み、これまで育まれてきた集落文化が失われつつある。赤城山自体も、かつてのような神域としての位置付けから観光地へと変化し、昭和中期あたりまではにぎわいをみせたものの、交通事情の変化やレジャー産業が多様化する中で、往時ほどの勢いはみられなくなっている。

しかしながら、前述の「赤城颪」をはじめ、県内では「赤城」の名がつく地名や道路、物産が数多くあり、人々の暮らしと密接な関りがある。加えて、NPO 法人赤城自然塾の調査によれば、平成 12 年（2000）当時、県内小中学校 540 校のうち約 42%もの学校が校歌の一節に「赤城山」を使用しており、赤城山が本市のみならず群馬県全体のシンボルとして認識されていることを示唆している。

そこで、人々の暮らしに寄り添い、群馬のシンボルでもある赤城山に再度の価値づけを行うため、山頂からふもとまでの一帯にみられる歴史的風致を明らかにし、その維持向上を通じて、赤城山に対する理解を深めるとともに、赤城山及び東部農村地域への観光振興につなげることを狙いとする。

赤城南麓における歴史的資源の分布



1　赤城山信仰にみる歴史的風致

（1）赤城への信仰と特徴的な神事

赤城神社は、赤城山を御神体として祀る神社で、関東を中心に全国約 300 社あるといわれ、県内はもとより市内でもかなりの数にのぼる。延長 5 年（927）成立の「『延喜式』神名帳」には、名神大社として「上野国勢多郡赤城神社」の記載があり、赤城大沼のほとりの「大洞赤城神社」、山腹にある「三夜沢赤城神社」、山麓の「二宮赤城神社」が論社（延喜式に記載された神社と同一もしくはその後裔と推定される神社）であるとされるが、どの神社を指すのかは特定されていない。

前述の三社をはじめ、各社ではそれぞれの神事が執り行われるが、いずれも古社ならではの特徴的なものが多く、中には赤城山中の峰々をまたぐものや、山腹から山麓までを範囲とする大がかりな神事もある。

（2）関連する建造物

【赤城山信仰を構成する建造物】

①赤城神社（大洞赤城神社）

大洞赤城神社

赤城大沼のほとりの赤城神社は、赤城大明神、豊城入彦命のほか数柱を祭神とし、赤城山と山頂の湖（大沼・小沼）、沼の水（御神水）を御神体とする。古くから幅広い信仰を集め、江戸時代には歴代前橋藩主が自ら参拝した記録が残る。

社伝によると、当初は神庫山（現在の地蔵岳）に祀られていたが、大同元年（806）に大沼の南のほとりに遷座した際、年号に因んで神社周辺が「大洞」と呼ばれるようになり、当社も「大洞赤城神社」と称されるようになったという。また、南北朝時代に成立した「神道集」には、赤城大明神に関する説話が 3 話掲載されており、大沼・小沼に祠を祀った記述があることから、当時は沼が祭祀の中心であったと考えられている。なお、明治 20 年（1887）以降は、赤城山内に鎮座するいくつかの神社が当社に合祀されている。

境内にある「赤城神社御造成費寄附芳名碑」によれば、現在の社殿は昭和 45 年（1970）に建設されたもので、その際、約 1,200 年鎮座した古来の地から現在地である小鳥ヶ島に遷宮されている。赤城大沼は冬場に凍結することで知られるが、凍結した湖面の向こうに見える社殿は非常に神秘的で、見る者を圧倒する荘厳さが備わっている。

②赤城神社（三夜沢赤城神社）

三夜沢赤城神社

赤城南面の中腹、三夜沢の地に位置する赤城神社は、「三夜沢赤城神社」とも呼ばれ、創建の伝承に由来する豊城入彦命と大己貴命のほか数柱を祭神とする。境内には、近江三上山の百足退治で知られる藤原秀郷（俵藤太）が献木したとされる樹齢 1,000 年を超える 3 本の杉（三夜沢赤城神社のたわらスギ・県の天然記念物・昭和 48 年（1973））があり、文武の神として多くの武将から崇敬された。現

在は、境内地全体が樹齢の高い木々からこぼれる淡い光に覆われ、神々しい気配があたり一面に漂っている。

様々な記録から、当社の変遷には紆余曲折があり、かつては東西２宮であったところ明治初期に合併して１宮になったことが分かっているが、正確な時期は不明である。本殿と中門は、明治２年（1869）に建てられたもので、復古神道の影響で、伊勢神宮に代表される神明造りとなっている。白木の建物で、直線的な切妻造りの屋根に千木や堅魚木が載せられた、簡素な造りである。なお、本殿内宮殿は昭和 38 年（1963）、本殿並びに中門は同 48 年（1973）、惣門は同 53 年（1978）に、それぞれ県の重要文化財に指定されている。

櫃石

当社へ至る主要地方道大胡赤城線沿いには、約 2.7km にも及ぶ参道松並木が現存し、つつじの名所としても親しまれる。また、当社から北方向に約 1km 登った赤城山荒山の中腹（標高 877.9m）には、櫃石（県指定の史跡・昭和 38 年（1963））と呼ばれる高さ 2.8m、周囲 12.2mの巨石がある。磐座信仰（大きな岩や石には神が宿るという考え）の対象として赤城山南麓を中心とした広い地域から信仰を受けたもので、周辺からは手捏土器や、鏡・剣・玉をかたどった石製模造品などが多数出土していることから、６世紀頃の祭祀遺跡と推測されている。

③二宮赤城神社社地

二宮赤城神社

二宮赤城神社社地は、堀と土塁が巡らされた環濠遺構で、中世における社地（境内地）の形態を今に伝えるものとして昭和 59 年（1984）に市の史跡に指定された。

二宮赤城神社は赤城山麓の田園地帯にあり、三夜沢赤城神社と同様に豊城入彦命と大己貴命のほか数柱を祭神とするが、数ある赤城神社の中で唯一「二宮」を称する社で、赤城山信仰における「里宮」として中心的な存在であったと推察される。三夜沢赤城神社との関係は深く、年に２回、両社間で神輿の渡御があるほか、三夜沢と当社の間には複数の近戸神社[1]（本社領域の入り口にある神社）が鎮座するのが特徴である。

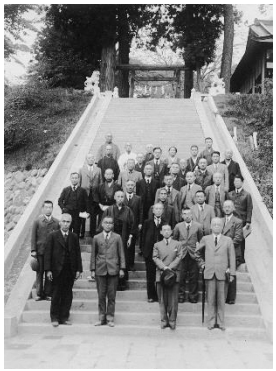
二之宮の式三番叟

社伝によれば、当社は戦国時代に荒廃したものの、江戸時代初期の大胡城主・牧野氏によって整備されたとされる。現存する社殿の建築年は不詳であるが、前述の社地をはじめ、納曽利面や梵鐘、絵馬など、中近世の文化財が数多く残されており、当社の由緒ある歴史を示している。

なお、当社に伝わる「二之宮の式三番叟」は能楽の原型とされる農村神事で、県内で唯一上演される式三番であり、現在、市の重要無形民俗文化財に指定されている。

[1] 近戸神社とは、赤城の神を近いところに勧請したことを意味する。

④大胡神社の参道



昭和 18 年(1943)当時の大胡神社の参道
※牧野忠昌氏提供

大胡城跡の北側、近戸曲輪に位置する大胡神社は、豊城入彦命と大己貴命を祭神とし、明治中期までは「近戸神社」と呼ばれた。現在の社殿の建築年は不詳であるが、境内南側の参道は、少なくとも昭和 18 年（1943）には設置されていたことが複数の写真から明らかとなっている。

社伝によると、当社の南に位置する大胡城内には、二宮赤城神社の別当寺である「玉蔵院」があったことから、当初は二宮系統の近戸神社であったようであるが、その後、天正 17 年（1589）の「三夜沢赤城神社奈良原紀伊守宛の書状」によると、当時の大胡城主であった大胡常陸介高繁が、三夜沢赤城神社の神職に大胡城の守護として赤城明神を祀りたい旨を申し出ていることから、これ以降は三夜沢系統の近戸神社に変化したと推察される。

また、東京都新宿区赤城元町（通称・神楽坂）にある赤城神社は、牛込（現在の東京都新宿区）に移住した大胡彦太郎重治が上野国赤城神社から勧請して正安 2 年（1300）に創建したと伝わる。古くは赤城大明神、赤城明神社と呼ばれたが、明治維新に際して赤城神社に改められた。

⑤近戸神社（月田近戸神社）

月田近戸神社

粕川の東岸に鎮座する近戸神社は、地名から「月田近戸神社」とも称される。赤城神社と同じく赤城山信仰の神社とされ、大己貴命と豊城入彦命を主祭神とする。社伝によれば、創建は延暦 13 年（794）で、社殿は鎌倉時代の宝治元年（1247）に造営された。令和 3 年（2021）の群馬県近代寺社建築調査では、月田村明細帳の記述から、現在の建物は寛延 2 年（1749）のものと推定されている。境内には県内最古とされる狛犬がある。

例大祭では、600 年続いてきた獅子舞「月田のささら（月田近戸神社の獅子舞）」（県指定の重要無形民俗文化財・平成 14 年（2002））が奉納され、その後、神輿（近戸神社神輿）（市指定の重要文化財・昭和 49 年（1974））を担いで粕川西岸の外宮に渡御する「御川降神事」が行われる。なお外宮には、平成 13 年（2001）に御旅所が造営されている。

⑥産泰神社

東部田園地帯の小山に鎮座する産泰神社は、木花佐久夜毘売命を祭神とし、古くから安産・子育ての神として知られ、県内はもとより関東一円から参拝者が訪れる。

産泰神社　本殿

創建は不詳であるが、本殿の裏には約 13 万年前に赤城山の「石山なだれ」により出現したといわれる磐座があり、古代から信仰の地であったことが推察される。また、南北朝時代に成立した「神道集」によれば、赤城神社が三体の神（赤城三所明神＝大沼・小沼・地蔵岳）を祀っていたことから、「三体」が「産泰」へ変化したもので、元は赤城山信仰の神社であったとする説もある。

現在の社殿は本殿・幣殿・拝殿・神門からなる権現造りで、近世の神社建築様式の指標となる遺構であるとして、境内地とともに平成６年（1994）に県の重要文化財に指定されている。社殿は東西方向に一直線に並んだ配置となっているが、前橋城の守護神とするため、城主の酒井氏の命で西に向けたと伝えられている。本殿は宝暦13 年（1763）に建てられ、後から彫刻が追加された。外観は彫刻で埋め尽くされており、軒下の高い位置から縁の下まで様々な動植物や故事を題材とした彫刻が見られる。幣殿と拝殿は文化９年（1812）に建てられ、幣殿には本殿と同様に多くの彫刻が見られる。幣殿には天井画があり、平成７年（1995）の修復工事の際に、源氏物語の場面が描かれていることが明らかとなった。また、祭礼行事には出雲神楽の系統をひく太々神楽があり、現在も 23 座が舞われている。

【赤城山信仰を由来とする街並みを構成する建造物】

⑦赤城大鳥居

赤城大鳥居（以下、大鳥居）は、昭和 40 年（1965）の主要地方道前橋赤城線の道路拡幅に際し、市民から浄財を募って建設されたもので、「赤城神社一之鳥居」とも称される。主要県道をまたぐ格好で設置されており、大きさは高さ 21.3m、幅 28m にも及び、鳥居の北には大正８年（1919）建立の「赤城山登山口」の石碑も見られる。

赤城大鳥居

赤城山登山口の石碑

大鳥居から北東の小暮神社には、赤城大鳥居の前身で以前この場所に設置されていた「旧小暮一の鳥居」（市指定の重要文化財・平成７年（1995））が現存する。境内にある記念碑（平成６年（1994））によれば、旧小暮一の鳥居は天明４年（1784）に赤城山の登山口（前橋口）に設置されたもので、当時、全国的な飢饉や浅間山大噴火などの世情不安から、赤城山の鎮魂加護を祈念して建設されたという。

旧小暮一の鳥居（市指定の重要文化財）

旧小暮一の鳥居（昭和8年）（出典：『勢多郡行幸記念誌』国立国会図書館デジタルコレクション）

赤城山への登山口は、前橋口・水沼口・大胡口・敷島口・渋川口・沼田口・梨木口・追貝口の８か所あり、大洞赤城神社の社伝によれば、江戸時代にはすべての登山口に鳥居が設けられていたが、前橋城主が大洞赤城神社へ向かう（登拝）参道の鳥居であったことから、前橋口の鳥居が「一の鳥居」とされたようである。なお、８か所の登山口のうち、鳥居が現存するのは前橋口のみとなっている。

⑧赤城神社御神幸の輿懸

毎年４月と 12 月に、三夜沢赤城神社と二宮赤城神社の間を神輿が往復する「御神幸」と呼ばれる神事があるが、途中の休憩箇所の一つがこの「輿懸」である。古くは「お輿懸の森」または「字腰掛け」と呼ばれた土地のことを指し、御神幸のしきたりが行われるうえでの重要な場所であることから、昭和 55 年（1980）に市の重要有形民俗文化財に指定されている。

赤城神社御神幸の輿懸

⑨阿久沢家住宅

柏倉町の主要地方道大胡赤城線近くに位置する阿久沢家住宅は、赤城山南麓地域ならではの特徴をよくあらわした建物である。この地方で養蚕が盛んに行われる以前の典型的な民家の形を残していることから、昭和 45 年（1970）に国の重要文化財に指定された。

屋根は耐水性が高いヤマガヤ（ススキ）を用いた茅葺で、上部にはアヤメ科のイチハツという植物を植え、その根で棟からの雨水侵入を防いでいる。建物は四角い単純な形をしており、屋内外に多くの柱があるが、これは建築技術が発達していない古い時代の古民家であることを示している。

平成 24 年（2012）には市の所有となり、定期的な燻蒸の実施等、適切な維持管理がなされている。周辺には屋敷林や井戸跡も残り、この地域の生活様式や良好な農村景観を体感することができる。

阿久沢家住宅

屋根上部の拡大写真

（3）歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

①御神幸（オノボリ）

三夜沢赤城神社（以下、三夜沢）と二宮赤城神社（以下、二宮）には、「御神幸」または「オノボリ」と呼ばれる特殊神事がある。この神事は、二宮にいる娘神が、父神のいる三夜沢へ衣替えのため渡御するという伝承に由来するもので、古くは「神衣祭」と呼ばれた。実際には、3 月と 12 月の最初の辰の日に、赤城の神を奉じた神輿が両社間を行き来するものであるが、一説には、農事が始まる 3 月に赤城の神を山（三夜沢）から里（二宮）にお迎えし、収穫が終わる 12 月に里（二宮）から山（三夜沢）へお帰りいただくことを意味するとも伝えられており、赤城山が農耕の神としても信仰されてきたことを示している。

御神幸のはっきりとした起源は分かっていないが、江戸時代後期に三夜沢赤城神社の神主が記録した『年代記』には御神幸を指すと見られる記載があるほか、安政 3 年（1856）に二宮赤城神社の宮司が記した請書には、「御神幸の行事は古来、三夜沢赤城神社の東西両宮へ行っていたが、正徳年間（1711～1716）以後西宮だけとなった。それを旧例に復することにした」という内容が記されており、少なくとも江戸時代中期には行われていたものと考えられる。

渡御の様子
（三夜沢赤城神社）

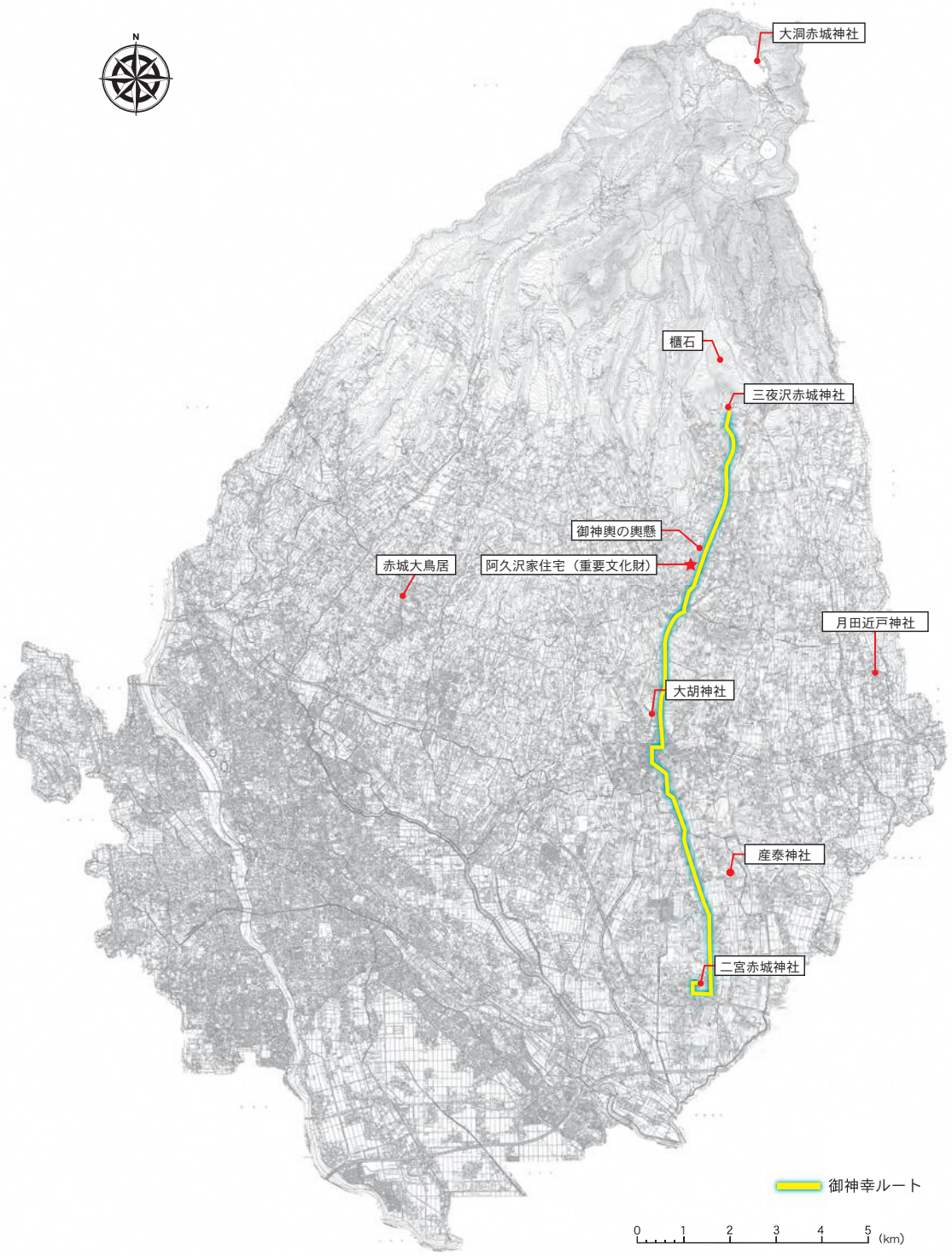
御神幸の当日は、総代と氏子の代表が二宮赤城神社で道中の無事を祈願する祭典を行い、拝殿から担ぎ出した神輿を約 12km にわたり渡御する。現在は徒歩ではなく自動車を使用しているが、道中の 2 か所で休憩し、接待を受ける風習は現在も続いている。1 か所目は、二宮・三夜沢の両社に由来する近戸神社である河原浜町の「大胡神社」で、2 か所目は、三夜沢と大胡の中間地点にある柏倉町の「輿懸」である。

輿懸での休憩
※いずれも下田昭一氏提供

とりわけ輿懸では、代々、近隣の「阿久沢イッケ」の住民（20 数世帯）が奉仕するという独特のしきたりが見られる。「イッケ」とは一家・一族の

ことで、輿懸から 500ｍほど南に位置し、御神幸の道中、脇を通過する阿久沢家住宅（国の重要文化財）は、この本家筋に当たる。二宮からの神輿が到着すると、イッケの住民がこれを出迎え、設置された藁の仮宮に御神体（神衣（かんみぞ））を安置した後、一行は茶や菓子でもてなされる。

なお、この神事は「二宮赤城神社の御神幸」として、平成５年（1993）に市の重要無形民俗文化財に指定されており、神輿の渡御は現在も毎年行われているが、阿久沢イッケによる輿懸での接待は、平成 27 年（2015）以降休止状態となっている。



②赤城山の山開き

大洞赤城神社の遠景。手前には赤城大沼が広がり、背後には雄大な黒檜山がそびえる。

5月8日（旧暦4月8日の月遅れ）は赤城山の「山開き」の日である。これは登山の解禁日のことではなく、山岳信仰の「神が山と里を行き来する」という伝承に由来するもので、冬の間、霊山奥深くにおわした赤城の神々を招いて祀る神事（御降臨）のことである。かつては、山開き当日に神の御力や霊威に預かろうと、里村から大勢の人々が山を登り、その依り代である大洞赤城神社で参拝した。これを「登拝」と呼ぶ。

昭和11年（1936）の「山頂漫歩」によると、「この日は山麓の村々、赤城神社の氏子が四方の道から登って来て、山は一年に一度の賑わいを呈する。常番小屋には店が出て、朝の十時から昼の二時頃迄は神社から原への小橋の上を押し返すような騒ぎである。（※漢字は常用に変換）」とあり、山開き当日はふもとから多くの人が山を登り、大洞赤城神社周辺は臨時の市なども開かれて終日にぎわったという。このことは、当時の新聞を含めて複数の文献に記されている。また、平成4年（1992）の「赤城山民俗記」によれば、市内の小坂子町の町規約には「5月8日は旧例により赤城山赤城神社（大洞赤城神社）に毎戸五穀豊穣祈願奉拝すること」とあり、かつては集落全体での登拝（総参り）が実際に行われていたようである。

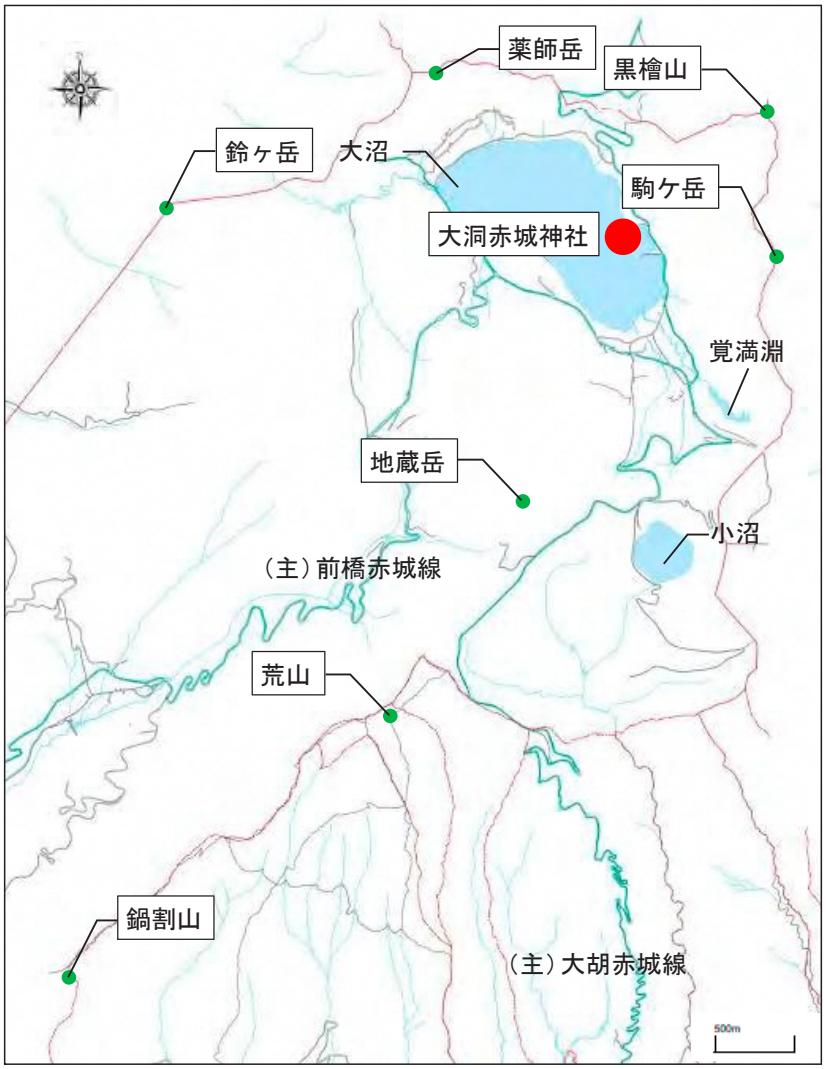
昭和40年（1965）に県道4号前橋赤城線（現在の主要地方道前橋赤城線）が全面改良され、自動車でのアクセスが飛躍的に向上すると、ふもとから徒歩で登拝する人は徐々に少なくなり、娯楽としての登山が主流となっていった。これに伴い、山開き当日の喧騒ぶりは以前ほどではなくなったが、現在も山麓の住民や自治会関係者、氏子らが集まる光景は変わらず、古くからの神事は今も続けられている。

①境内に集まる関係者と神職　②境内での儀式
③各峰に祀られる「梵天」　④先達に梵天が託される場面
※いずれも下田昭一氏提供

大洞赤城神社の山開きの神事は、春季例大祭と同日の5月8日に行われるが、その前5～6日間をかけて社殿や境内を清めるところから始まる。当日は、ふもとの自治会役員や氏子、山仕事に関わる事業者ら関係者が境内に集まり、儀式が厳かに執り行われる。その際、「荒山」、「黒檜山」、「駒ケ岳」、「鈴ケ岳」、「地蔵岳(神庫山)」、「鍋

割山」、「薬師岳」の７峰の名称が記された「梵天」に祝詞が捧げられる。

儀式が終わると、各峰の山頂の祠に梵天を祀ることとなるが、かつては「先達」がその役目を担ったという。先達とは修験道の用語で、峰に入る修験者の先導となる熟達した山伏のことを指し、霊山である赤城山には多くの修験者が常駐していたことに由来する。近年まで、先達は氏子や里の住民などの複数人が務め(写真の黄色の装束)、山開き当日に７つの峰を一斉に登ったが、現在は市内の山岳会のメンバーが数日をかけて峰々を登っている。



③その他の特徴的な神事

ア　月田のささら（月田近戸神社の獅子舞）

月田近戸神社の例大祭は、天下泰平・五穀豊穣を祈願する神事で、毎年８月最終週の土日２日間にかけて開催され、「月田のささら」と呼ばれる。「ささら」とは、神社に奉納される獅子舞のことで、月田近戸神社の獅子舞は「天下一日挟流」と呼ばれる流派に属する。起源は室町時代であるとされ、600 年の歴史を誇る伝統文化として、平成 14 年（2002）に県の重要無形民俗文化財に指定されている。

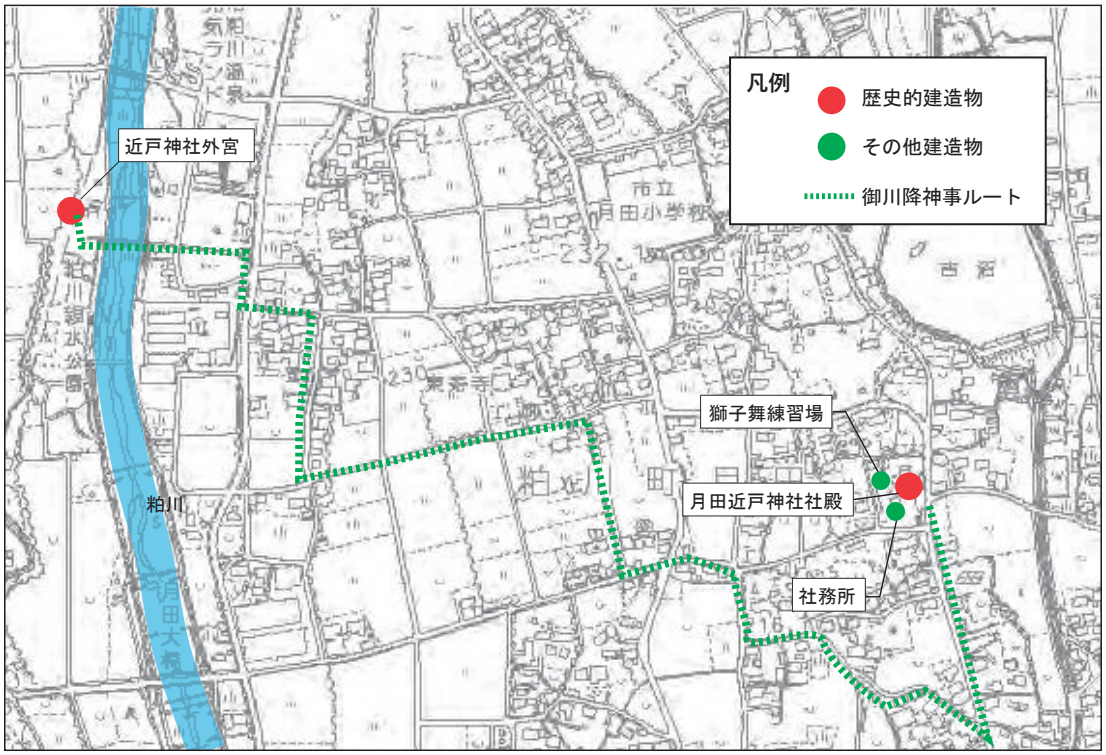
月田のささら

例大祭の初日は「宵祭り」と呼ばれ、神社の境内から当該年度の自治会長宅まで獅子舞道中（行進）を行って舞を披露する。これは、舞の仕上がり具合を里長に見てもらったうえで２日目を迎える、という古いしきたりに由来するものである。その後、境内へ戻り、労をねぎらう余興が開かれて初日は幕を閉じる。

外宮へ向かう様子

御川降り

２日目は「本祭り」と呼ばれ、境内での式典に続き、神職と神輿（市指定の重要文化財（昭和 49 年（1974））を伴って神社の「外宮」まで獅子舞道中を行う。途中、代々の氏子の軒先には高さ 10m もの旗竿が設置され、集落を挙げて獅子連を鼓舞する。「獅子山」とも呼ばれる外宮に到着すると、獅子連は舞を奉納し、その間、神職により粕川（一級河川）への濁酒（糟酒）流しが行われる。これらの一連の行事は、「御川降神事」と呼ばれ、河川の名の由来ともいわれている。その後、一行は境内に戻り、クライマックスとなる「雌獅子隠し」が奉納され、一頭の雌獅子を二頭の雄獅子が奪い合う躍動感あふれる舞が披露されて終了となる。



イ　産泰神社の太々神楽

４月 18 日の産泰神社例祭では、昭和 48 年（1973）に市の重要無形民俗文化財に指定された「産泰神社太々神楽」が奉納される。社伝によれば、当社の太々神楽は出雲神楽の系統を引くもので、近郷近在の神楽に多大な影響を与えたとされ、明和元年（1764）の奉納額が存在することから、少なくとも 250 年以上の歴史を有することが分かっている。

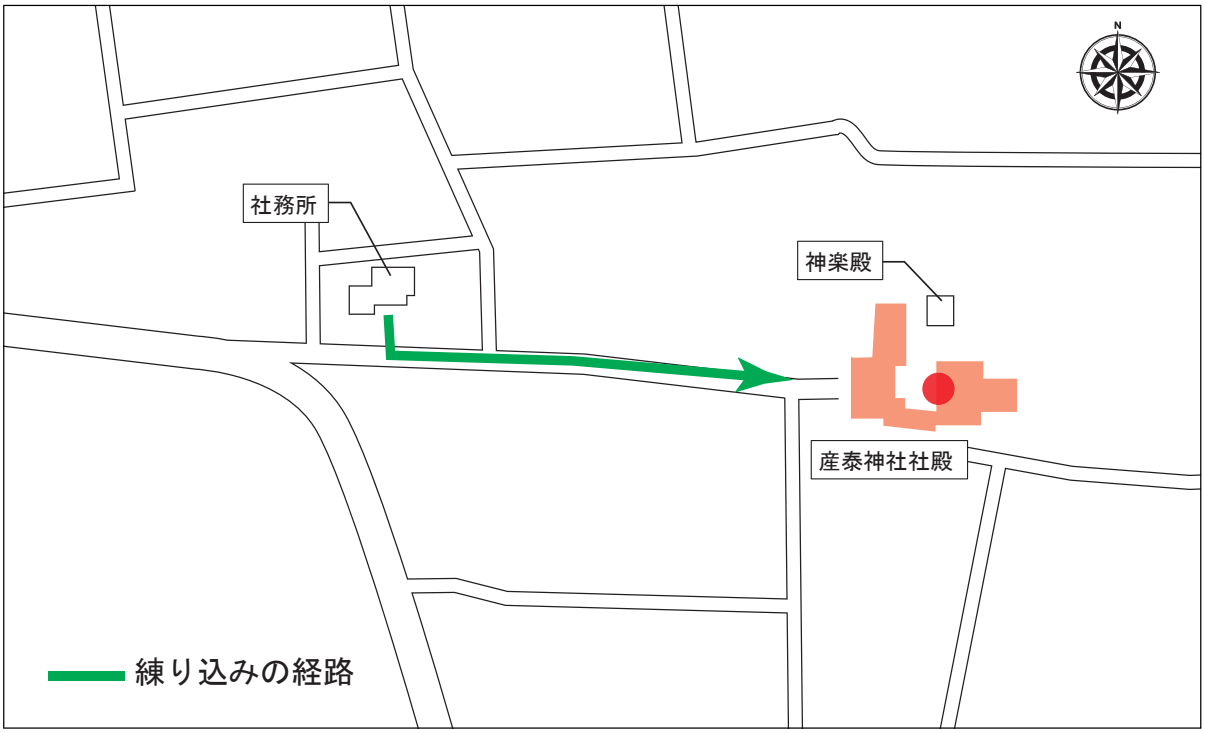
産泰神社太々神楽

例祭に先立ち、宮司宅より社殿まで邇邇芸命の天孫降臨[2]の神話に習い、猿田彦命（天狗）を先達とし、神職・役員が行列を組み「練り込み」（参進）を行う。本殿での祭儀の後、神楽の奉納が行われるが、舞には順番があり、始めに式舞の四座が行われ、1座目が「反閇」、2座目が「四神」、3座目が「宇受売」、4座目が「岩戸駆け出し」の舞で天岩戸より天照大御神が出現される。その後、賑やかな愛嬌舞が奉納される。やがて神楽も終盤を迎えると、終わりの三座「像義」、「加具土」、「山の神」が行われ、この7座は必ず舞わなければならないとされている。昭和45年（1970）には氏子が中心となって保存会が結成され、例祭で舞う7座を含む23座が現在も披露されている。

練り込みの様子

産泰神社は古くから安産・子育ての神として親しまれており、四季を通じて安産祈願やお宮参りの参拝客が途切れることなく訪れるため、参道下の離れた位置にある社務所から境内へ向かう行列の姿は、否が応でも多くの参拝客の目に留まる。また、境内が周辺道路よりも数 m 高い小山の上にあることから、例祭が始まると、小山の上から笙や太鼓の音色が響き渡り、集落は春の到来を感じるという。

小高い山にある産泰神社



[2] 記紀の神話の一つ。天孫の邇邇芸命が天照大神の命を受けて、三種の神器を携え、諸神を連れ従え天降ったことをいう。

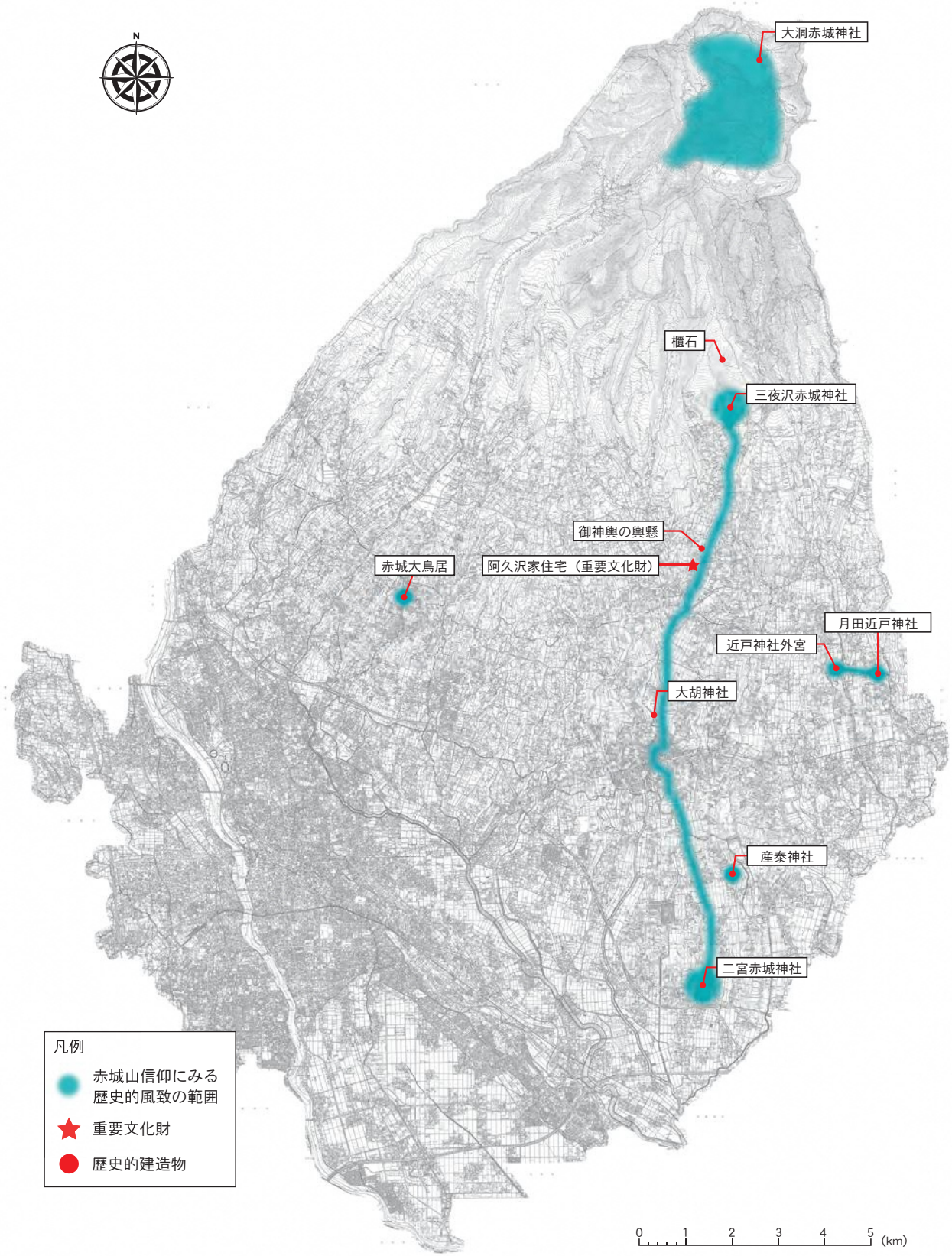
（4）まとめ

三夜沢赤城神社から二宮赤城神社まで神輿が行き来する「御神幸」や、赤城の峰々に梵天を祀って巡る大洞赤城神社の「山開き」などは、広範囲に及ぶ（移動距離の長い）祭礼行事であるにも関わらず、山麓の住民や氏子らによって絶えることなく続けられている。また、里村の産泰神社や月田近戸神社で受け継がれる「太々神楽」や「ささら（獅子舞）」は、近隣住民が日頃から衣装や関連する建造物の保全を担い、祭礼当日は庭先に注連縄や旗竿を飾って盛り上げるなど、集落を挙げての年中行事となっている。これらは、赤城の山頂からふもとにかけて、今も赤城山への信仰が大切にされていることを示しており、赤城山信仰に由来する良好な歴史的風致が形成されているといえる。

一方、赤城神社は市内に広く点在するが、幹線道路の開通や農家の減少などにより、村（集落）の鎮守としての役目を終えたところもあれば、住民の高齢化により地域行事の担い手が不足し、長く続いてきた農村神事を行えなくなったところもあるという。

今後の社会経済情勢の変化によっては、これまで述べてきた祭礼行事についても同じような状況に陥る可能性があるため、該当地域のみならず市を挙げて存続する道を模索していく必要がある。そのためには、各赤城神社とそれらの祭礼行事が本市にとって価値の高いものであることを再度認識するとともに、さまざまな神話をしっかり伝承し、多くの人から協力を得られる体制を構築していくことが重要である。

Ⅲ - 1　赤城山信仰にみる歴史的風致の広がり



2　「大胡暴れ獅子」にみる歴史的風致

（1）歴史情緒ある街並みと暴れ獅子

大胡地区は、藤原秀郷（俵藤太）の子孫で平安時代にこの地を治めた坂東武者の名門・大胡氏に由来する地域で、古くは「大胡郷」と呼ばれる赤城南麓の中心地であった。鎌倉時代以降、この地は群雄割拠の戦渦に巻き込まれていくが、天正 18 年（1590）に三河国牛窪（愛知県豊川市）の牧野康成が城主となり、城下町の整備や周辺農村部の開発などが行われて現在の大胡地区の原型が形成された。元和 2 年（1616）に牧野氏は越後国頚城郡長峰（新潟県上越市吉川区長峰）に移封となり、大胡は前橋藩に統合され、その後は日光裏街道沿いの宿場町として栄えていった。

大胡宿は日光への街道筋のみならず、各地へと通ずる交通の要衝でもあったため、赤城神社や産泰神社への参拝に向かう旅人が往来したほか、近郷近在の交易の中心地としてもにぎわった。近代に入ると、市場町としての機能に加えて旅館や料理屋、運送屋などが集積し、明治 22 年（1889）には 1 町 7 村が合併して大胡村となり、明治 32 年（1899）には大胡町へ移行、勢多郡部を牽引する町として発展を続け、平成 16 年（2004）に前橋市と合併して現在に至る。

近年、郊外部における住宅の増加や大型商業施設の進出などにより、旧大胡町時代の繁華街は空洞化が進んでいるが、町の地割は古くから変わらぬところが多く、かつて城下・宿場であったことを感じさせる街並みが残る。また、毎年夏には、江戸時代から続く勇壮な「暴れ獅子」が町中を練り歩き、勢いがあった頃の町の姿を彷彿とさせる。

（2）関連する建造物

【大胡暴れ獅子を構成する建造物】

①大胡神社の参道

Ⅲ－１－（２）－④を参照。

②八坂神社

宿場の市神として江戸時代から信仰を集めてきた神社とされ、隣接する建立碑によれば、かつては大胡町字上町 21 番地に鎮座していたが、昭和 35 年（1960）に現在地に遷宮し、現在の鉄筋コンクリート造の建物は昭和 43 年（1968）に竣工したものである。

ガラス張りの社の中には、夏の風物詩である「大胡祇園まつり」にて担ぎ出される天王様の神輿が安置されている。

八坂神社

【大胡暴れ獅子を由来とする街並みを構成する建造物】

③大胡城跡

南北 670m、東西 310m に及ぶ平山城の跡で、その規模や保存状態の良さなどから、昭和 42 年（1967）に県の史跡に指定されている。

鎌倉幕府の御家人であった大胡氏が天文年間（1532～1555）に築造したと推測され、天正18年（1590）には牧野氏が城主となり、牧野氏の移封後は前橋藩主であった酒井氏が城代を置いたが、酒井氏の姫路への移封後、廃城となった。

本丸跡は、大胡地区の東部を見渡せる高さにあり、素晴らしい展望が開けている。また、桜が多く植樹されており、春には花見客でにぎわう。

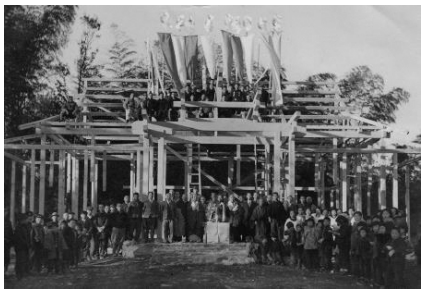
大胡城跡

④養林寺

寺伝によると、大胡城主となった牧野氏は、坂東武者の名門・大胡氏発祥の地への赴任に感激し、大胡氏の念仏道場の草庵跡であった場所に、自らの菩提寺として養林寺を建立したのだという。

敷地内には、中世館跡である堀跡や桃山時代の様式が見られる山門が残るほか、昭和50年（1975）に市の史跡に指定された牧野家墓地と、徳川家供養塔がある。

現在の建物は昭和30年（1955）に再建されたもので、牧野氏の子孫が上棟記念の写真及び完成後の航空写真を保管している。



養林寺上棟式の写真（昭和30年）
※牧野忠昌氏提供

⑤大胡宿の道しるべ（大胡宿道標）

日光裏街道と前橋からの道が合流する三差路に、「大胡宿の道しるべ」と呼ばれる道標がある。道標には、「西・前橋　米野」、「南・五料（利根川の五料河岸）　伊勢崎」、「北・日光　大間々」、「東・文化6年6月」と刻まれており、赤城南麓の交通の要衝であった様子が伝わる貴重な史料として、昭和50年（1975）に市の重要有形民俗文化財に指定されている。

なお、道標から南に下る道路が主要地方道大胡赤城線で、大胡町交差点から上毛電鉄大胡駅北側の宮関橋西詰交差点あたりまでが「大胡祇園まつり」の主会場となっている。

大胡宿の道しるべ

（3）歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

○大胡の暴れ獅子

毎年、7月最終週の土日にかけて行われる「大胡祇園まつり」では、日曜日の夕方に荒々しくも勇壮な獅子頭が現れる。これが大胡の暴れ獅子である。

大胡祇園まつりでは、伝統的な神事から地域住民の出し物まで多様な催しが行われる。主な実施範囲は、北端は大胡神社、西端は堀下自治会館、東端は大胡町踏切、南端は茂木町交差点に囲まれる大胡地区の中心部一円で、開催期間中には辺り一帯が賑やかな雰囲気に包まれる。

まつりのメイン行事である暴れ獅子はもともと八坂神社の神事として行われていたもので、江戸時代末期に大胡で疫病が流行し、それを鎮めるために

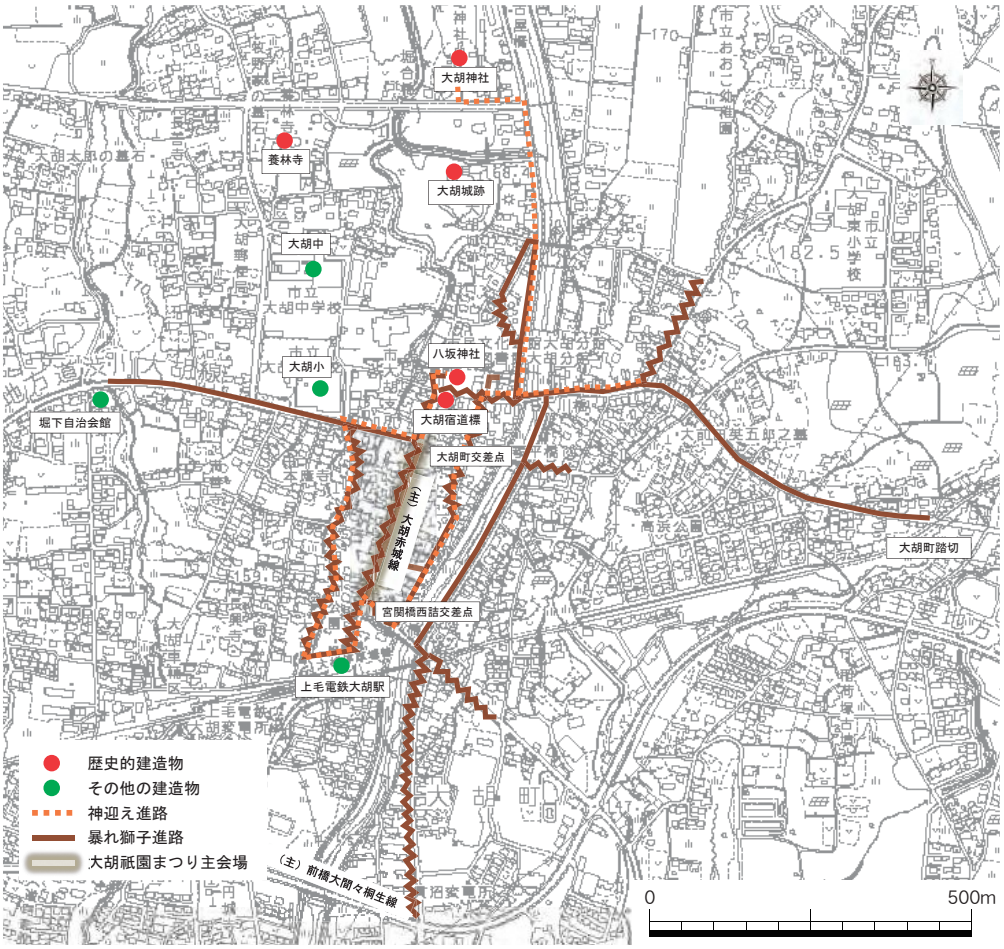
大胡祇園まつりのチラシ

天王様（牛頭天王）と暴れ獅子が練り歩くようになったのが起源とされる。実際に、文政２年（1819）の「前橋御用留」には、「大胡町鎮守牛頭天王祭礼」の記載があり、その頃には始まっていたことが推察される。また、途中の休止・再開状況は定かではないが、明治 13 年（1880）の祭りの催行願いの写しが見つかっているほか、暴れ獅子の担ぎ手を務める大胡町青年会が昭和初期と思しき集合写真を保有しており、長らく続く伝統行事であることは間違いない。

大胡の暴れ獅子

神事の流れは、土曜日に大胡神社から天王様をお迎えし（神迎え）、八坂神社の神輿に安置することから始まる。八坂神社に向かって大胡神社の参道を下ると、西側に養林寺、正面に大胡城跡を臨むことができ、大胡の歴史を象徴する風景が広がる。続く日曜日の朝、八坂神社で安全祈願祭が執り行われると、神馬を先頭に神輿、神職、世話役、天狗からなる行列が町中を渡御する。午後、いよいよ暴れ獅子が登場。獅子を各家の軒先に担ぎ入れて厄を払うしきたりに倣い、15 時頃から夜にかけて獅子が約 700 軒の家々を一軒ずつ練り回る。巡行ルートは、八坂神社を中心に半径約 800m もの範囲にわたり、道中、獅子は大胡宿道標の脇を通り、大胡城跡を見上げつつ、何度も行き来を繰り返しながら、19 時を過ぎる頃には祇園まつりの主会場に姿を現す。会場は、上州大胡風神太鼓の音色も手伝って一気に熱を帯び、担ぎ手はさらに荒々しく獅子を揺らしながら会場内の商店や家々を揉み歩く。22 時頃、獅子は八坂神社前に戻ってクライマックスを迎える。

厄払いをする暴れ獅子



（4）まとめ

かつて大胡暴れ獅子は、旧大胡町時代の大胡一区の行事であったが、現在は大胡地区挙げての行事となっている。大胡祇園まつりの実行委員会によれば、これは担ぎ手の減少なども理由の一つであるが、その根本には、暴れ獅子を通じて大胡地区全体を盛り上げたいとの願いが込められているのだという。

旧大胡町は「勢多郡部の雄」と呼ばれるほどに栄えていたが、その頃と比べると、現在の地区中心部は静かな印象を受けてしまう。しかしながら地区住民の多くは、坂東武者の名門・大胡氏に由来する地名に誇りを持ち、他都市には見られない勇ましく迫力のある神事に胸を張る。実際、巨大な獅子頭が荒々しく担がれ、揉まれ、担ぎ手の男衆が塗料の朱色に染まっていく姿はまさに圧巻であり、地区全体を盛り上げる力が宿っているように感じられる。

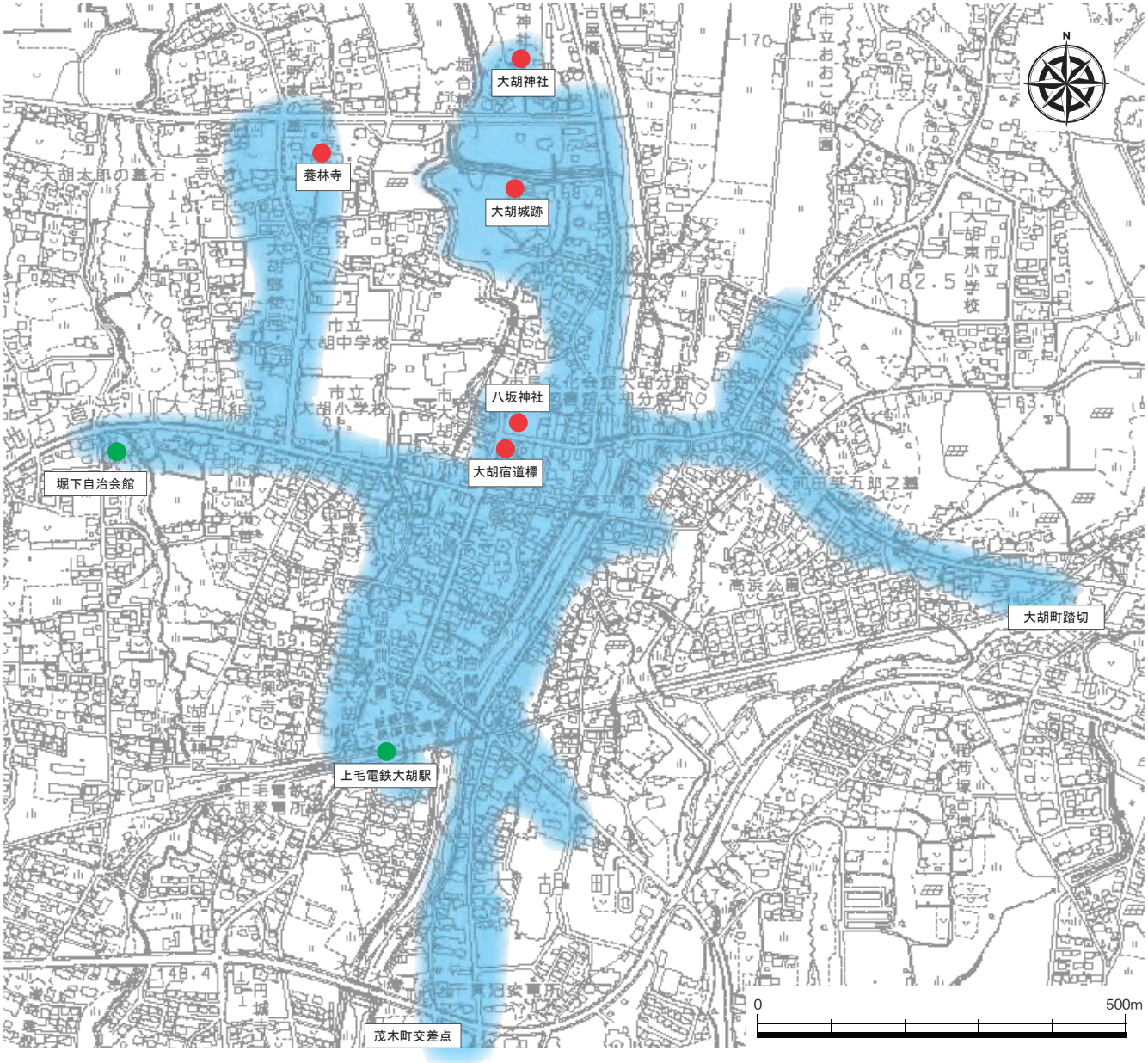
上毛電鉄大胡駅から北へ向かって歩くと、街道筋の線形が残る通りの向こうに、高くそびえる大胡城跡が見える。その城跡を背景に眼前で繰り広げられる暴れ獅子は、大胡地区でしかみられない固有の光景であり、本市が誇るべき歴史的風致として維持向上していかなければならない。

【歴まちコラム・牧野氏と大胡】

牧野氏が大胡地区を統治したのは 20 数年であったが、牧野氏にとっては立藩の地であったことから、城下の開発や近隣の江木村（現在の江木町）の開墾など地区発展の礎を築くことに尽力したほか、荒廃していた二宮赤城神社の再建なども行っている。これらの功績を称えるため、牧野氏のかつての居城であり、大規模な城郭構造が残存する大胡城跡を舞台とする「大胡城・牧野氏まつり」を平成 27 年（2015）から開催している。平成 29 年（2017）以降は、地元伝統行事との相乗効果を目的として大胡祇園まつりと同日に開催されるようになった。

大胡城・牧野氏まつり

Ⅲ - 2　「大胡暴れ獅子」にみる歴史的風致の広がり



3 剣聖「上泉伊勢守」の顕彰活動にみる歴史的風致

（1）剣聖のふるさととしての誇り

武士が活躍する時代が長く続いたわが国では、剣に秀でた者が数多く輩出された。とりわけ「剣豪」と称される人物は多くいたが、「剣聖」と呼ばれるのは上泉伊勢守（以下、伊勢守）ただ一人であるとされる。

上泉伊勢守銅像

伊勢守は戦国時代の兵法家・武将で、剣術「新陰流」の祖として知られる。大胡氏の支族である上泉氏の一族で、名を秀綱（後に信綱に改める）といい、大胡城の支城として築かれた上泉城に在城した。直接的な史料が存在しないため、生没年を含めてその生涯には諸説あるが、箕輪城主長野信濃守在原業政家臣録（永禄元年（1558））や公家・山科言継が記した「言継卿記」（大永7年（1527）～天正4年（1576））、熊本県の丸目家に所蔵される将軍・足利義輝からの感状（永禄7年（1564）推定）などから、武田信玄からの仕官の誘いを断って剣術修行の旅に出たこと、時の将軍に兵法を披露し従四位下に叙せられたことなどが分かっている。

晩年には、新陰流を広めることに心血を注ぎ、多くの門弟が師事したとされる。中でも、新陰流の奥義を継承する「印可状」は、柳生宗厳（柳生新陰流）、宝蔵院胤栄（宝蔵院流槍術）、丸目蔵人佐（タイ捨流兵法）に与えられ、新陰流を継承した柳生家は、その後、徳川将軍家の兵法指南役となり、新陰流は「天下泰平の世の剣」として広く知られることとなった。

新陰流には、「懸待表裏」（一つの働きにこだわらず相手に応じて無理なく転変して勝つこと）や「活人剣」（相手に技を出させてその力を利して勝つこと）といった特徴があり、優れた剣術（兵法）であったことは言うまでもないが、優勝劣敗の時代にあって出世や名声よりも剣を極める道を選び、多くの門弟を著名な剣術家へと育て上げた指導力は、伊勢守の人格や人柄によるものであるとの評価が高く、それらのことが唯一無二の「剣聖」の称号をもたらしたものと推察される。

市内桂萱地区の上泉町では、こうした傑物が輩出されたことを町の誇りであると捉え、戦後まもなく「上泉伊勢守顕彰会（以下、顕彰会）」が発足し、早くから伊勢守に関する調査研究・顕彰活動が続けられている。

（2）関連する建造物

①上泉城址

戦国時代の赤城南麓地帯はその大半を大胡氏が統治しており、上泉には大胡城の支城として上泉城が築かれ、城主は大胡氏の一族が上泉氏を名乗って在城した。16世紀に築造されたと考えられ、伊勢守の曽祖父である義秀が築いたとする説がある。

上泉城址

顕彰会の調査によると、城域は東西600m、南北400mに達しているとされ、上泉郷蔵付近に本丸と二の丸跡が残り、西林寺付近が一の郭、玉泉寺付近が出丸跡と推定されている。

②諏訪神社

上泉郷蔵に保管されていた「上泉古文書」に「諏訪明神」の記載があり、古くから上泉の鎮守として崇敬を集めてきたことが示されている。棟札によれば、本殿が建造されたのは弘化4年（1847）である。

諏訪神社

平成26年（2014）の「諏訪神社建築調査報告」によると、現在の本殿を造営する際､境内にあったほかの社を合祀して｢七社神社｣に改称し、明治41年（1908）の「上泉神社」への改称を経て、昭和4年（1929）に諏訪神社へと改称されたことが分かっている。

毎年10月には、昭和45年（1970）に市の重要無形民俗文化財に指定された「上泉の獅子舞」が奉納されるが、獅子頭や笛などは伊勢守が奉納したものであると伝えられている。

③伝上泉伊勢守墓碑

伊勢守の菩提所とされる西林寺（左）
本堂前に掲げられた木札（右）には｢新陰流開祖上泉伊勢守藤原秀綱菩提所　上供昭和32年（1957）｣とある

西林寺の寺伝によると、当寺は上泉城主上泉憲綱の嫡子・上泉伊勢守藤原信綱の菩提所であるとされ、本堂正面には｢新陰流開祖　上泉伊勢守藤原秀綱菩提所｣の札が掲げられている。寺宝には、上泉伊勢守が日本初の剣道天覧で正親町天皇から下賜されたと伝わる十六菊の紋章が入った御前机がある。

本堂裏の一角は、歴代住職の墓地になっており、その中心には「開基禅室玄参」と刻まれた墓碑があり、地元では伊勢守の墓であると伝えられている。墓前には、没400年祭の記念に建立された「剣聖　上泉伊勢守藤原信綱顕彰之碑」があり、揮毫は当時の内閣総理大臣で群馬県出身の福田赳夫氏によるものである。

御前机

伊勢守の墓と伝わる墓碑

④上泉郷蔵

寛政8年（1796）、上泉城本丸跡に前橋藩が建てた間口8間・奥行3間･平屋建の土蔵で､飢饉に備えて穀物を蓄えることを目的とした。明治以降､県内の郷蔵は他の目的に利用され､本来の姿を失うものが多かったが､上泉郷蔵は明治42年（1909）まで当初目的のまま使用された。

昭和26年（1951）に「上泉郷蔵附上泉古文書」として県の史跡に指定され、平成5年（1993）に全面解体修理が行われている。

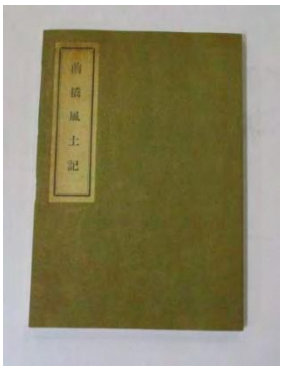
上泉郷蔵

（3）歴史と伝統を反映した人々の活動と周辺の市街地環境

○「剣聖」のふるさとづくり

ア　郷土の偉人としての認識と上泉の獅子舞

現在の上泉町一帯で、伊勢守がいつから郷土の偉人として認識されていたのかを判断する材料として、古いものでは貞享元年（1684）の「前橋風土記」が挙げられる。



『前橋風土記』

上泉武蔵守信綱。上野国勢多郡上泉村人也。当時好剣術日夜尽心。後尤得於其精。故公方召至于洛陽師尊賜官従四位下。柳生氏。親受其術伝于今以為祖焉。（漢字は常用に変換）

（上泉武蔵守信綱は、上野国勢多郡上泉村の人也。当時、剣術を好くし日夜心を尽くす。後、尤もその精を得たり、故に公方召して洛陽に至らしめ、師とし尊んで官を従四位下に賜う。柳生氏、親しくその術を受け、今に伝えて以を祖と為す。）

また、明治 31 年（1898）の「前橋案内」では、名所旧跡の一つとして「上泉村信綱山荘」が紹介されている。

『前橋案内』 一部改変
（出典：群馬県立図書館デジタルライブラリー）

上泉村は市を距る東一里十余町、昔々上泉城所在の地なり。曰く、上泉武蔵守信綱、当時（以下、前橋風土記の文章引用）（中略）信玄に仕え撃剣を以て名あり後、暇を乞うて武者修行し、和州に於て其術を柳生又左衛門宗重に伝授し、後名を武蔵守と改む云々。（漢字は常用に変換、句読点を追加）

これら 2 つの史料の存在により、前橋の住民はかなり早い段階から、上泉出身の伊勢守が剣術の達人で、それが柳生家に伝授されていることを認識していたことが分かる。特に、伊勢守生誕の地である上泉の住民にとって、その認識は非常に強く、古くから郷土の偉人を称える草の根的な活動が展開されていたと考えられる。実際に、上泉城址近隣の西林寺には、伊勢守の墓と伝わる古い墓碑があるが、これは地区住民等によって没後しばらくしてから建立された可能性が高く、古来より伝わる「上泉の獅子舞」が諏訪神社から上泉城址まで練り歩くようになったのも、地区で伊勢守が認識されるようになった後のことで、伊勢守への謝意を表すために始められたものである。

上泉の獅子舞　附　獅子頭3点
（市指定の重要無形民俗文化財）

上泉の獅子舞は、遠く承和年間（834～848）に始まったとされ、五穀豊穣と地域の平和と繁栄の願いを込めて、毎年 10 月 17 日直近の日曜日に行われる諏訪神社の例祭にて奉納される。県内に伝わる獅子舞のどの流派にも属さない独特の舞で、動きがゆっくりとしており、足さばきに歌舞伎や雅楽の舞の振り付けが見られる特徴がある。この獅子舞で現在使われている獅子頭や笛などは、明確な年代は不明であるが戦国時代に伊勢

守が奉納したものであると伝えられており、この伝承以降、獅子舞が上泉城址まで行列するようになった。

行列は現在も毎年行われており、一行は、諏訪神社の遥か後方にそびえる赤城山に向かって北上し、かつて城の南の要害をなした桃ノ木川を渡り、伊勢守の墓碑が佇む西林寺の南通りから再度北上して上泉城址（上泉町公民館）へ入り、古式ゆかしい舞を奉納している。

イ　顕彰活動を通じた剣聖のふるさとづくり

上泉の住民にとって伊勢守は郷土の偉人であり、伊勢守を称える草の根的な活動は古くから行われていたが、伊勢守の生涯や偉業を外部に向けて発信し、上泉を「剣聖のふるさと」にふさわしい地区にしていこうとする活動は、上泉伊勢守顕彰会から始まったものである。

顕彰会が発足した時期は定かではないが、昭和 34 年（1959）に顕彰会の主催で「没 380 年記念式」が開催され、日本剣道連盟最高顧問や柳生宗家を招いて新陰流の演武が行われたことが当時の新聞記事に掲載されており、以降、さまざまな活動が行われている。

生誕 500 年記念碑（左）の隣の流祖生誕之地の碑（右）には、印可状の一文である「其上之儀ハ可寄真實之人候」（其の上の儀は真実の人に寄るべく候）が刻まれている

没 380 年記念式の写真
（昭和 34 年（1959））

・昭和 34 年（1959）
　新陰流 14 代柳生厳長氏を招いて没 380 年記念式
・昭和 54 年（1979）
　没 400 年祭、西林寺の墓碑前に顕彰碑を建立
・昭和 60 年（1985）
　15 代延春氏を招いて墓参
・平成 20 年（2008）
　生誕 500 年祭にて上泉城址に伊勢守の銅像を建立
　「伊勢守生誕の里」（看板型と灯籠型）の設置開始
・平成 28 年（2016）
　東京柳生会による上泉合宿
　16 代耕一氏を招いて第 1 回新陰流流祖祭（市との共催）
　上泉城址に石碑「流祖生誕之地」を建立
・平成 29 年（2017）
　16 代耕一氏を招いて第 2 回新陰流流祖祭（市との共催）
　顕彰会の働きかけにより BS 放送の 2 時間ドラマ「新陰流上泉伊勢守信綱」が放映される
・令和 元年（2019）
　16 代耕一氏を招いて第 3 回新陰流流祖祭（市との共催）

昭和 54 年（1979）建立の顕彰碑

こうしてみると、顕彰会の活動は節目の記念行事の開催から始まり、時間をかけて上泉が伊勢守生誕の地であることを内外に知らしめ、柳生家との交流を深める努力を続けてきたことが分かる。また、機会あるごとに石碑や銅像、看板を設置し、「剣聖のふるさと」「流祖生誕の地」としての雰囲気づくりを続けてきた足跡も見て取れる。現在、これらが奏功し、当地を訪れる歴史愛好家や剣術愛好家などが増えているという。

「上泉伊勢守　生誕の里」案内看板（左：看板型、右：灯籠型）

また、柳生家との交流を深める中で、顕彰会の会員数名が新陰流の剣術修行を重ね、柳生宗家の許可を得て平成 16 年（2004）から地元・桂萱中学校の武道場で稽古会を行うようになった。現在では上泉町自治会が新設した集会所を道場として使用している。開始当初こそ会員同士の稽古規模であったが、「天下一の剣術」の評判から参加者が徐々に増加、各地で開かれるイベントや武道大会などで演武の依頼が寄せられるようになった。やがて、演武で披露される優れた技の数々に感銘を受けた剣道団体から、顕彰会に対し、大会の冠に伊勢守の名前を使用したい旨の申し出がなされた。こうして始まったのが、平成 29 年（2017）からの「上泉伊勢守杯・赤城神社奉納武道大会」と令和元年（2019）からの「上泉伊勢守『信綱旗』剣道大会」である。特に、赤城神社奉納武道大会は、文武の神として知られ、かつて伊勢守が山籠もりの修行をしたと伝わる三夜沢赤城神社（三夜沢町）の境内で行われる伝統の大会で、第 30 回を記念して「上泉伊勢守杯」と冠するようになったものである。現在では多くの少年剣士たちが、剣聖・伊勢守と新陰流のことを認識し、憧れの存在になっているという。

新陰流を披露する顕彰会の会員
演武では伊勢守が考案したとされる
「袋竹刀」が用いられる

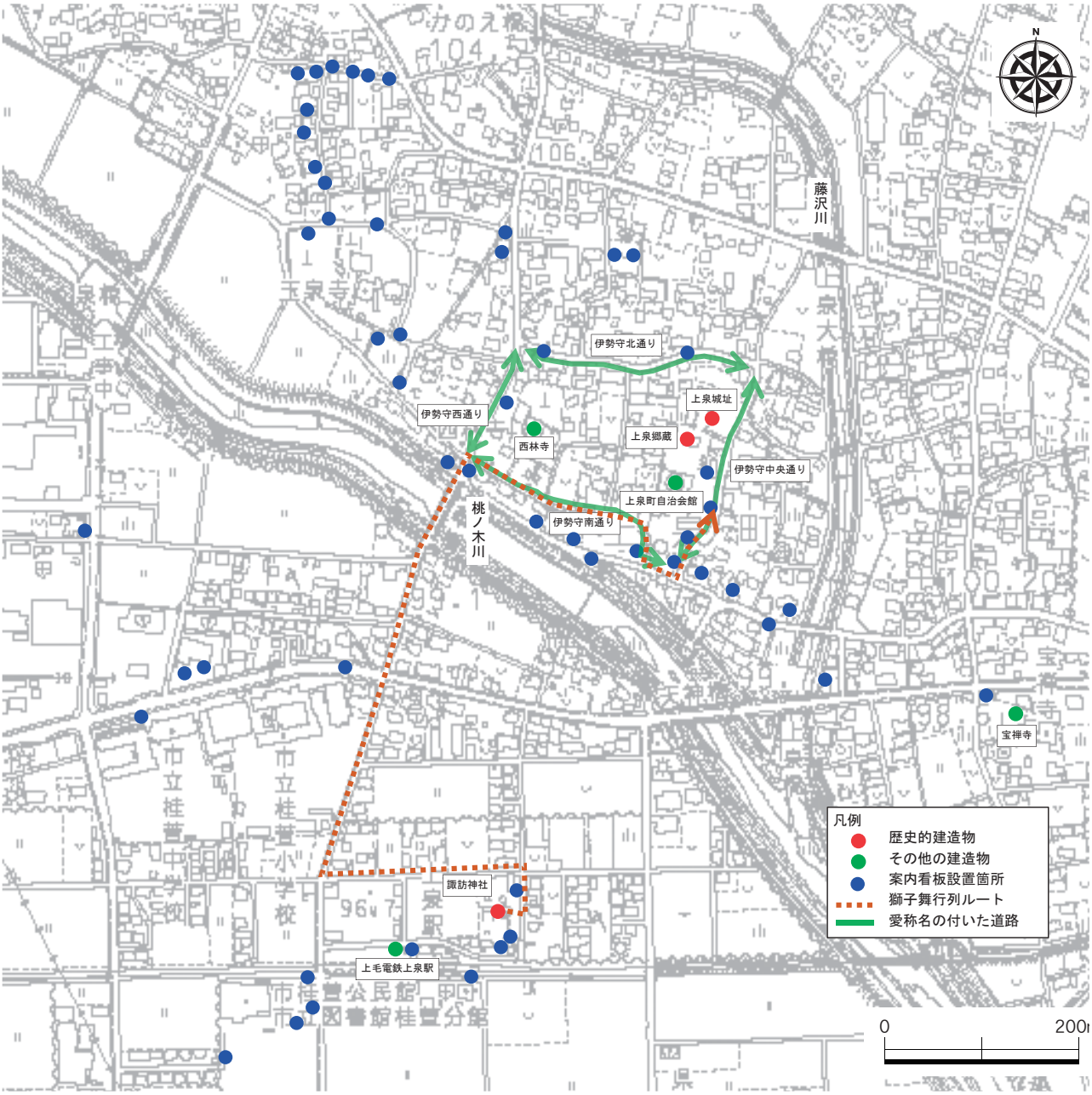
赤城神社奉納武道大会の様子

新陰流流祖祭の様子
西林寺から上泉城址までの行列
（上・中）
柳生宗家と門弟による演武（下）

このほか、平成 18 年（2006）には顕彰会から派生した「上泉伊勢守睦会」が発足し、伊勢守の生涯を題材にした「八木節」（両毛地域の俗謡）を考案し、各地でのお披露目に勤しんでいる。

このように、顕彰会が発足したことで、伊勢守にまつわる記念行事が定期的に開催されるようになり、伊勢守生誕の地であることを示す環境整備が進んだ。また、近年では新陰流の稽古から剣道大会、民謡まで、幅広く「伊勢守」を冠する活動が続けられている。

なお、上泉城址の四方を囲む主要通路は、古くから「伊勢守中央通り」、「伊勢守北通り」、「伊勢守西通り」、「伊勢守南通り」と称されていたが、地区の自治会が「前橋市道路愛称名登録制度」に申請し、平成 26 年（2014）に本市の道路愛称として登録されている。



（4）まとめ

上毛電鉄中央前橋駅から電車に乗って 10 分ほど、沿線に「上泉伊勢守　生誕の里」の看板が目につきはじめて間もなく上泉駅に到着する。駅を降り、目の前の諏訪神社を出発した獅子舞の後を追って北上すると、２つの河川に囲まれた古風で落ち着いた雰囲気の集落が見えてくる。一行は、あちらこちらに「上泉伊勢守」の看板が立つ西林寺の南通りを東に進み、やがて坂道を登って城跡と思しき高台に隣接する町の集会所敷地へと入っていく。そこでは、凛と立つ武士の銅像と「流祖生誕の地」と刻まれた石碑を背に、古流剣術の気迫あふれる演武が繰り広げられている。

これが、新陰流流祖祭当日の光景である。流祖祭そのものはまだ始まって間もないが、古くから地元で継承されてきた獅子舞や、顕彰会による各種の環境整備、柳生家との長年にわたる交流が下地となって、「剣聖のふるさと」の風情や趣を直接体感できる貴重な機会となっている。

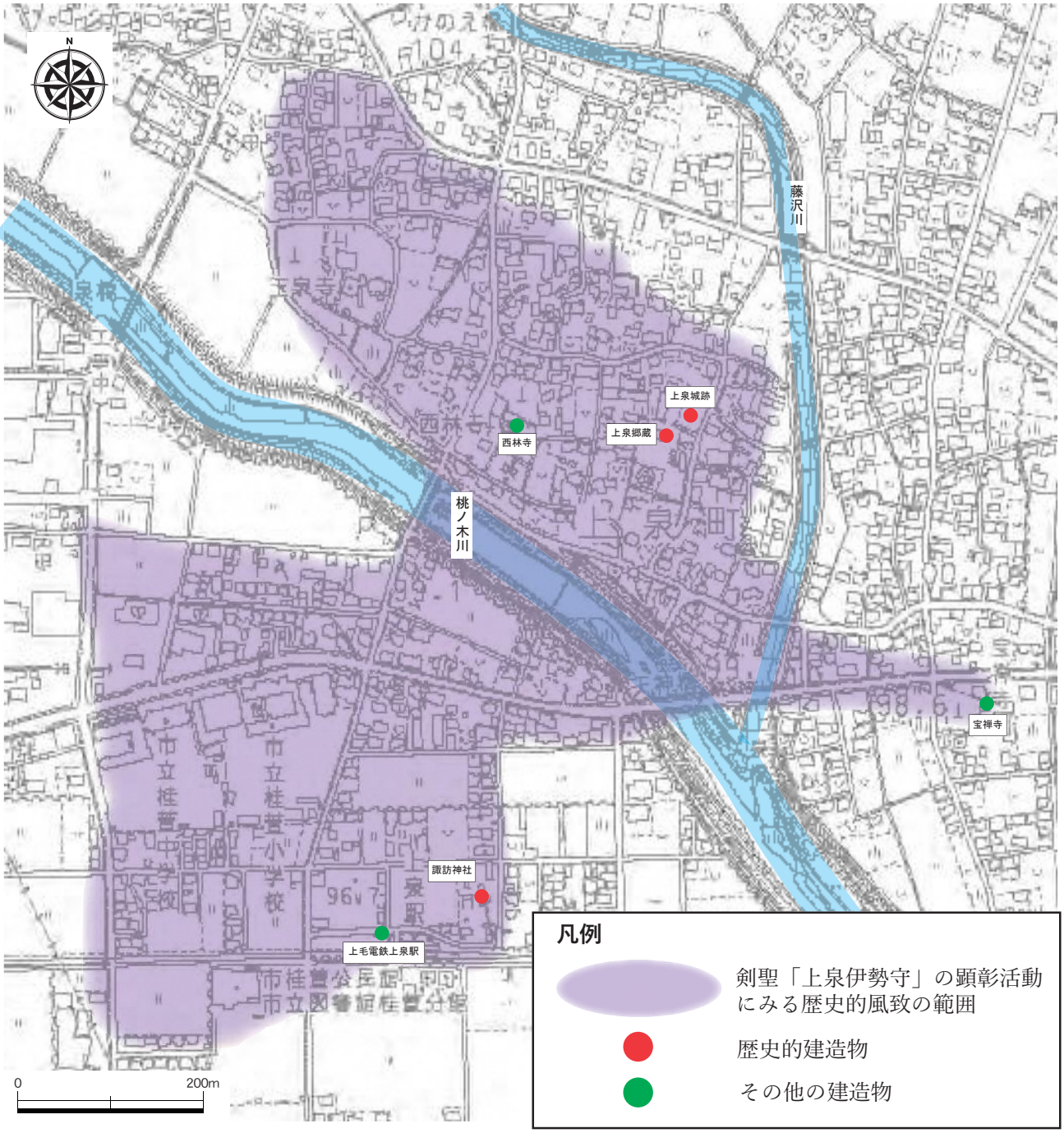
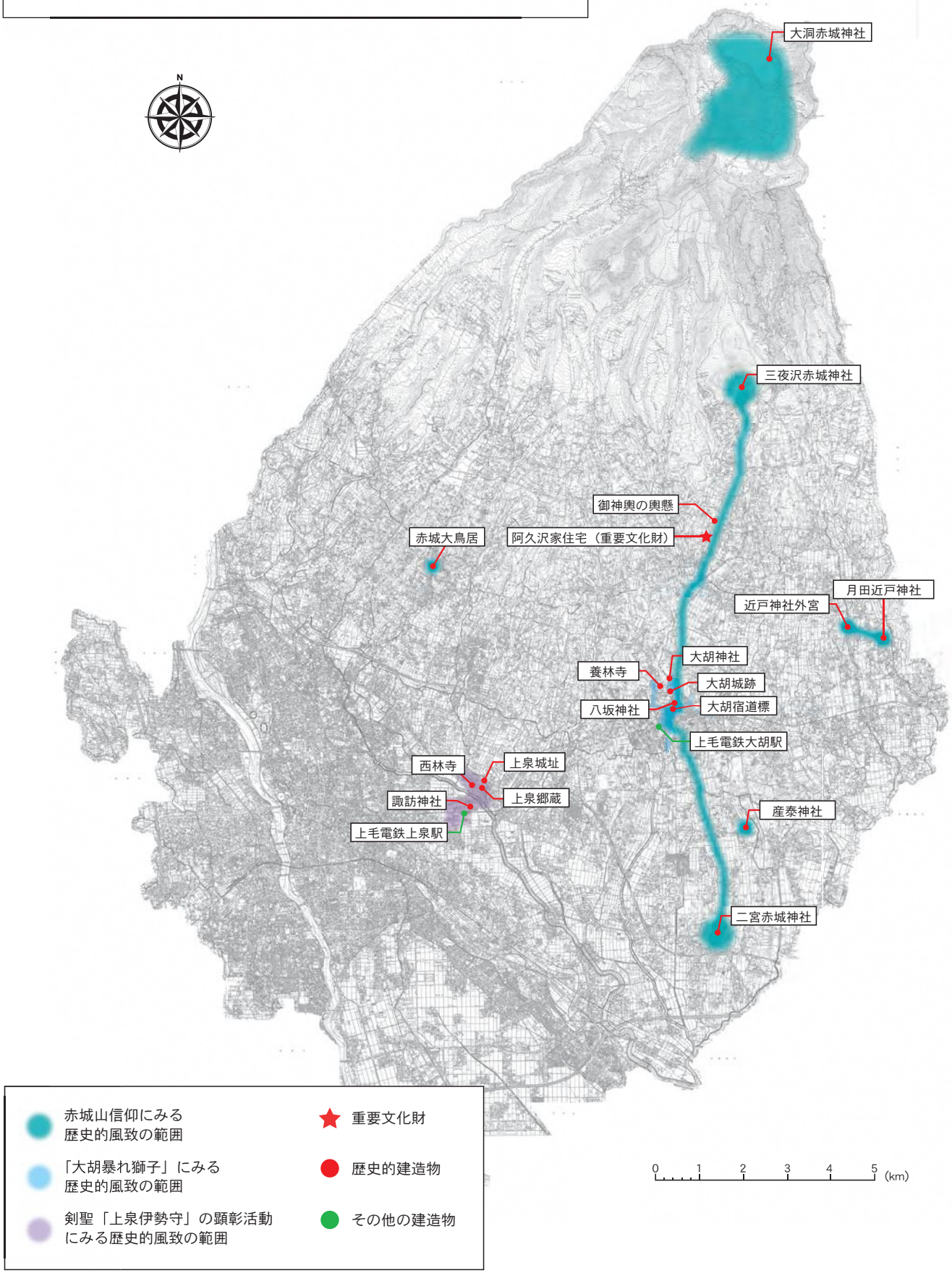
伊勢守の功績はかねてから高く評価されていたが、史料の少なさゆえに、その生涯や活躍ぶりを描いた書籍が少なく、長らく「知る人ぞ知る」存在であった。近年、アニメやゲームなどのコンテンツ産業が急成長する中、古流剣術や武将がクローズアップされる機会が急増し、「刀剣女子」と呼ばれる熱狂的愛好家の出現や、ゆかりの地を巡る「聖地巡礼」人気の高まりにより、伊勢守や新陰流への注目度は以前とは比較にならないほど高まっている。

昭和 30 年代から続く顕彰会の活動は、当初は伊勢守の存在を知らしめることに重きを置き、大河ドラマでの放映を悲願としていた。しかし、昨今の剣術・武将ブームは、ドラマ放映を遥かにしのぐ効果を秘めており、それに応じて活動のステージを進める必要があると考えられる。

幸い、顕彰会による地道な取り組みにより、すでに石碑や銅像、看板設置などが順次進められており、訪れる人へのおもてなし（ホスピタリティ）の基本的準備は整っている。また、近年では注目度の高まりや観光客の増加に伴い、顕彰会の活動がより一層活発化し、「新陰流流祖祭」の開催などを通じてさらなる魅力発信も進められている。

今後は、顕彰会・地域住民・行政が連携し、この地を訪れる誰もが「剣聖のふるさと」を感じられるよう、その環境づくりをより一層進めることが重要である。

Ⅲ - 3　剣聖「上泉伊勢守」顕彰活動にみる歴史的風致の広がり



III　赤城信仰と南麓集落にみる歴史的風致の広がり